研究ノート

ある江戸人の異文化理解(一)

Crossing Cultures in the *Edo* Era.

佐羽淡斎(一七七二～一八二五)の総宜楼の詩碑をめぐって

An Examination of *Sougiro*, a poem written in classical Chinese by Tansai Saba (1772~1825)

新谷　雅樹

SHINYA　Masaki

一

武州金沢八景は、かつて文人墨客にとっては雅遊の地であり、また江戸の庶民にとっては四泊五日くらいで楽しめる、お手頃の行楽地であった。

いつの頃からだろうか、瀬戸神社から大川に架かる瀬戸橋を渡って洲崎に入ったあたりに、「東屋」という旅亭があった。八景探勝に訪れる文人閒客の多くが投宿するという名店であったらしい。ここから見ると、弁財天の鎮座する琵琶島がつい目と鼻の先の対岸にあり、四方をうちのぞめば、「水陸(すいりく)の景気(けいき)も朝夕(あしたゆうべ)にかわり、金岡(かなおか)の筆もおよばざりしなり」[1]という山水の形勝が豁然とひらけている。平安朝の宮廷画師・巨勢金岡すら写生を断念しという風光の明媚を、東屋の泊まり客は二階の座敷にあがりさえすれば、手に取るように堪能することができたのである。こういう絶好の立地条件が買われて、また臨海という地の利を得ていたので取れ立ての鮮魚の活造りが売り物となって、店は大いに繁盛したようである。[2]

もともと東屋(あずまや)なんぞという和臭ただよう店名だったのが、豪商にして文人の佐羽淡斎が、あるとき、東屋の万端のサービスに感じ入って、「総宜楼」という唐風の別名をあえたという。どうも、このしゃれた名付け(ネーミング)が、旅亭東屋の宣伝に一役買ったようである。絹の名産地・桐生の絹買次商で、きっぷも金ばなれもよかった淡斎は、東屋にしてみれば上々吉のお得意であったろう。東屋もこれに応えて、「総宜楼」という別称を活学活用したようである。じつはこの命名(ネーミング)には、大窪詩仏も一枚かんでいるが、それについては追々述べることにしよう。

この東屋はまた、浮世絵師・歌川広重の『広重武相名所旅絵日記』(嘉永四年五～六月の制作)の恰好の画材となっていて、第十一景「旅亭東屋より眺望」という見開き二枚の写生画がある。[3] すばらしい一幅の絵である。このときの道連れが井上文雄(国学者・典医)、武谷栄方(ひろかた)(阿波藩江戸詰め近習役)の妻機子(はたこ)、それに氏名不詳の女性の三人で[4]、いずれも気心の知れたもの同士なのだろうが、ことさら性別を問題にすれば、この旅は仔細ありげである。当人たちはともかく、はたから見れば、道行きをする男女(アベック)二組というふうに色眼鏡で見られがちだからである。こういう旅も、江戸時代も後期になると、大目に見られたのだろうか？　もっとも、広重自身は大衆的人気があったから、ゆく先々で歓待を受けただろうし、旅亭の主人などから揮毫を所望されて、潤筆料を稼いだにちがいない。むろん、これが路銀のたしにもなった。江戸の文人墨客の長旅は、こんなふうに土地土地で、その種の礼金を稼ぎながら続けられ

たものである。当時、これを「田舎わたらい」といった。[5]

さて、以下に掲げた第十一景の画面をよくよく見れば、人妻・機子が二階の座敷から張り出した縁の欄干にもたれたまま絶景に見とれ、その後ろで画筆と画帖を手にした広重が写生(スケッチ)をしている。ここに広重の写生の企みがあったわけで、だれが見ても、まず二人連れに目がいく仕掛けになっている。いわば、この男女の後ろ姿が構図の始まりで、二人の目路はるかに控えている山明水媚の風景が、構図の終わりである。この空間構成は斬新と言うほかない。

「東屋より眺望」(28・2×58・4cm)神奈川県立図書館蔵

この開けっぴろげで、密室でない座敷が、右下の画面を占めているところに注目されたい。まず、こういうところが従前の風景画の文法から逸脱している。たとえば伝牧渓・玉澗の「瀟湘八景画」[6]は、ほとんど人気のない、雲気靄々たる空間の連なりである(人間はあくまでも自然に包摂される点景として描かれているにすぎない)。いうなれば、こういう縹渺さこそ、水墨山水を絵画たらしめる気韻といっていいのだが、それにしても、旅心に浮き立つ江戸の民衆の心をつかむには、従前の「模山範水」の水墨画では高尚すぎる。こういう山水を俗に砕いて描いたのが、諸国名所絵や道中絵図などの類いで、その通俗性ゆえに、江戸の大衆的人気を博した。広重のそれは今日では世界的名声さえ博している。いっそ現代の目をもって見れば、機子・広重の二人はオーシャン・ヴィユーのリゾート・ホテルでくつろぐ二人連れのようだ、と考えれば得心がいく。

なるほど、十九世紀はじめから貨幣経済が発展し、諸国に各行各業が興り、宿駅はもとより陸路・水路まで整備されて、中央と地方の人びとの往来は、織るがごとき観を呈した――と言っても、まんざら誇張ではあるまい。その結果、一般庶民のたれもかれもが近郊・遠地の旅行に出かけるようになって、一大旅行ブームが起こったが、その大半は「行旅」というよりも、「行楽」という楽しみを主にしたものであった。熊さん八つぁんとて――決して文人風の「玩山遊水」ではないが――非日常の「山情水性」に接する愉快

を満喫して、おおいに浩然の気をやしなったにちがいない。してみると、上図はそういう江戸後期の浮世絵の図柄だと思えばいいわけである。くだんの広重一行も物見遊山を主とした行楽の客であって、中国の山水詩にあらわれるような窮途の客ではない。広重もそれを心得て、楽しそうに八景のスケッチしている。[7]

こういう眺望絶佳をほしいままにする旅亭の評判は、明治にはいってからも、流行りこそすれ廃れるようなことはなかった。伊藤博文ら大官貴顕の眷顧をこうむって、ますます名をあげたようである。伊藤公などは折々、ここで憲法の草案をねったという――いわくつきの旅亭である。

しかし昭和三十年、さしもの東屋も時代の波に押しつぶされて、ついに廃業のやむなきにいたった。思うに、高度成長期の新しいレジャーにそぐわなくなったからである。跡地には第一生命ビル(現金沢区)が建ち、その前に碑文のみが残されている。いかにも「蒼桑の変」の感を禁じえない。

八景中の東屋(33×46cm)　神奈川県立図書館蔵

上図の『武陽金沢八景略図』[8]は、いつのものか不明である[9]。画面右下に「東屋蔵版」、左下に「多桑斎写」とある。多桑斎とは聞かない名前であるが、旅亭東屋の板行にかかるものなので、わざわざここに掲げた。上図のごとき、いわば「八景早見図」といった体裁をみると、旅行が大衆化された江戸後期の印刷物のように見える(あるいは明治か?)。もちろん八景探勝の騒人韻士も多く訪れただろうが、なんといっても行楽客の来訪のほうが上まわったにちがいない。その一般の道案内とするために(また土産物とするために)、このような一目瞭然の多色刷りパンフレットが、おそらく大量に印刷されたのだろう。画面の中央のあたり、それとなく目立つように旅亭東屋が位置するという心憎い構図も、版元と絵師が巧んでしたことであろう。つまり、これが東屋の自己宣伝のための印刷物であることは明白である。門外漢の憶測にすぎないが、おそらく、これは東屋が有名な広重の「武陽金沢八景略図」[10]にあやかって出したものではなかろうか。多桑斎(多喜斎のもじりか?)の描く「八景略図」が広重のそれよりも雅致に欠ける憾み

があるからである。なんとなく明治の錦絵じみて見えるのも、わが僻目のせいか？

それにしても、なぜ東屋だけが持て囃されるのだろうか？　近隣にはたとえば扇屋、千代本（木造三階建てからの眺望を売り物にしていた）という名店も軒をならべているのに、『江戸名所図会』には、東屋の挿図だけが載っていて、他の二店のものは載せていない。他の二軒は無視してかまわないほど、東屋が最も由緒を誇ったということか？　それとも東屋の巧みな宣伝戦略が功を奏したのか？　今となっては、雲をつかむような話である。（ちなみに千代本は現存する）。[11]

二

江戸の昔、ここに「総宜楼」が存在したということは、かねて揖斐高氏の論文[12]によって承知することは承知していた。とはいうものの、金沢八景にまるで土地勘をもたない私は、それ以上のことは知ろうともしなかった。

率直にいうと、佐羽淡斎の名前さえ心得ておけば、以前はそれで事足りた。淡斎の詩業についても、『五山堂詩話』（二十五首採録）、『采風集』（五首採録）、『海内才子詩』（六首採録）、『盛音集』（一首採録）[13]といった江戸時代刊行のアンソロジーによって、二十余首を読んだきりにすぎない。どれを取っても如才ない詠み口で、これは雅客の詠であって、窮士の吟ではない。「君子、固より窮す」（『論語』衛霊公篇）といったような切羽詰まったところがないのである。いずれも感吟に値しなかった。

たとえば、天保二年（淡斎没後六年目）に、渡辺崋山は藩命を帯びて桐生を訪れたが、そのときの紀行文『毛武遊記』[14]の中で、地元の巨商大賈中、随一の名士だった淡斎の作詩を取り上げて、旦那芸すぎないと評している。これは酷評に近いが、貧窮の少年時から絵を売って糊口の資とせざるを得なかった崋山にしてみれば、また士林第一等を以て称せられた気位の高い崋山の眼から見れば、田舎の商人風情の道楽に見えても仕方なかっただろう。崋山の『毛武遊記』の記述は――当地の文雅愛好家の厄介になりながら――佐波家に対しては、どういう仔細があってか、いささか冷淡である。崋山は淡斎のつながる文学グループに親昵していたのに、である。（これについては稿をあらためて論ずるつもりである）

ここで実例を一首あげてみよう。柏木如亭編『海内才子詩』巻四（文政三年刊）所収の「雨中」という五律である。（引用の字体はワープロの都合上、旧体字、異体字などは、やむなく現代通行の字体を用いることにする。以下同じ）

茅屋隔塵寰　茅屋　塵寰を隔(へだ)て
柴門傍碧湾　柴門　碧湾に傍(そ)ふ
風清坡法竹　風は清し　坡法の竹
雨暗米家山　雨は暗し　米家の山

燕蹴箏琴過　燕は箏琴を蹴(けつ)て過ぎ
人敲棋子閑　人は棋子を敲(たたき)て閑なり
高眠深院午　高眠　深院　午なり
夢在水雲間　夢は水雲の間に在り

詩は平明な宋詩風のもので、日常の些事を詩材にとって清新である。かりに、この詩が『全宋詩』(宋人の詩を網羅した一大総集)の中に紛れこんでいたとしても、怪しむ中国人はいないだろう。まあ、それくらい日本人ばなれした作で、さすがは柏木如亭の斧鉞を経ただけあって、調べは高雅である。(ただし、自身の詩集『淡斎百律』中の「雨中」とはかなり異同があるが、いまは問題にしない)

詩中にいう「茅屋」、「柴門」とは、まあ、わび住まいを気取ったものだろう。周りには蘇軾が描いたような竹が風にそよぎ(坡法の竹)、米芾の描いたような雨に煙る暗い山が望まれる(米家の山)。結構な暮らしぶりである。淡斎は実業家でありながら、また音曲や囲碁の嗜みもあったらしい。琴棋書画の逸興、いずれもそらさないという、文人的隠逸ぶりである。「高眠」というのも、行い澄ました資産家の理想的な昼寝と解しておこう。

ぜんたい、淡斎の詩はこのような南宋の三大家(陸游、范成大、楊誠斎)からのお行儀のいい尋章摘句ともいうべき作風で、まま、その手並みに玄人っぽさを見せるのは、詩派を同じくする中央の詩人・市河寛斎、大窪詩仏、柏木如亭などの指導のおかげだろう――私はそう早分かりをして、それなら本場の三大家の山水詩・田園詩を読んだほうが時間の節約だと思った。もとはといえば、私の本筋はウソにも中国文学だからである。日本漢文学ではない。

ところが近年、池澤一郎氏の『江戸時代田園風景漢詩選』[15]というアンソロジーが出され、そのうち淡斎作が十九首も収められている。淡斎の師たる大窪詩仏の作が一首しか収められていないのに、である。いったい、この偏重は何か？　いまでも小首をかしげたままでいる。しかし、蜀山人、荷風の研究者・池澤氏の選詩眼に、はっとさせられるものがあった。二読、三読するうちに、地方群小詩人のひとりであると値踏みしてはおけない、何かを感じたのである。いまさらながら、自分の不明を恥じたわけだ。

また数年前、『通俗古今奇観』[16](文化十一年刊)の訳者・淡斎主人なるものが、じつは佐波淡斎と同一人だったということを知って心底おどろいた[17]。淡斎がこの種の白話俗文学まで勉強していたとは思いもよらなかったからである。

一般的に、江戸人は白話を「唐話(とうわ)」と言った。それは唐人(とうじん)――当時は中国人をそう呼んだ――の口頭語だということをはっきり意識していたためである。しかし鎖国時代には、長崎にでも遊学に行かないかぎり、ほとんど学習の困難な語学だった。しかも唐話は時代差・地域差が大きすぎて、標準的な発音・文法が皆無に等しい。加えて、白話語彙は中国社会の特殊性から生まれてきたものなので、日本の、いや、中国の字引にも載っていないものが多い。これに対して文章語の古典中国語は、すでに完成された文体であるから、江戸人がもって軌範とするに足る典籍は何十万巻もあった。由来、中国の文章語

と口頭語の差は雲壌もただならぬものがある。それゆえに、漢詩・漢文を得意する日本人なら大勢いたが、唐話を得意とするものは唐通詞(長崎の中国語通訳)以外にはいなかったのである。そういう時代に唐話を修得するということは、羅針盤なしに航海することと同じようなものだったから、目的に達するのに多大な時間を要した。素朴な疑問だが、あの仕事にも遊びにも達者だった淡斎に、こんな通俗小説を翻訳しているような時間的ゆとりがあったのだろうか？　また淡斎に白話を教えたのは誰だろうか？　テキストは何を使ったのだろうか？　いま言えることは、淡斎詩に白話語彙が多いのも、こういう勉強の成果だろうということだけである。

さらに意外なことに、信濃の晩晴吟社の詩人で、柏木如亭の一番弟子であった木百年が、淡斎と浅からぬ因縁があり、数年前、箱根湯本の東光庵に立つ山本北山一門の詩碑[18]を寓目するに及んで(おそらく淡斎が金主)、いったい佐波淡斎とはなにものなのか、少しく研究の歩を進める必要にせまられた。そのため手当たりしだいに諸書を渉猟しているうちに、「総宜楼」という漢名にしばしば行きあたったわけである。最初のうちこそ、その命名法(ネーミング)に成金趣味のような嫌みを感じたものの、後々考えれば、そうではない、よくできた名前であると認識を改めた。「総(す)べて宜(よろ)しき楼」とは、文雅の旅人にも一般の行楽客にも、一見して呑みこみやすいものだったにちがいないからである。

あらためて言おう――本稿の主題の第一は、ほかでもない、この総宜楼についてである。いまや影も形もない旅亭に関する資料は乏しい。しかし、乏しい中からやりくり算段して、調査のおよぶかぎりのことを示したい。そのうえで、ある江戸人の飽くことのない中華風の美的生活をのぞき見て、その異文化理解のありようを考えてみたい。それは中華に対する憧憬とか模倣とかといった言葉では片付けられない、いわくいい難い情熱だったはずだからである。

三

詳細な伝記は後にゆずるとして、いうところの桐生の淡斎佐羽芳(一七七二～一八二五)は、絹を商う実業のかたわら、詩書画という虚業にも熱心だった。とりわけ作詩には、本業をよそにするほど淫したという。[19]　しかし結論から先にいうと、淡斎の真骨頂は、絹で儲けたお金に物をいわせた文化的パトロンという役回りにあったと言っていい。そうだとしても、全体、それがいかほど大きな役回りかだったか、という問題になると、一口には言えない。それで、まずは地元の総宜楼からはじめて、その一端なりとも窺おうと調査の段取りをつけたわけである。

とっかかりをつかむつもりで、まっさきに訪れたのが、神奈川県立図書館郷土資料室である。ある司書の方に相談したところ、時を置かず「金沢区生涯学習グループ“わ”の会」編の冊子を示された。[20]　「あとがき」よると、これは同会の十周年記念事業として発行されたもので、初版(平成十九年六月)の内容を拡充したものであるという。私は一読して、“わ”の会会員諸氏のたゆまぬ好学の精神に心を打たれた。実をいえば、「総宜楼」(漢名)すなわち「東屋」(和名)という一致に気づいたのは、このときが初めであ

る。同会の調査に敬意を表するため、以下に、一字一句ないがしろにしないで全文を掲げる。

【総宜楼の詩碑】 そうぎろうのしひ

瀬戸の琵琶島神社の社殿の傍らにある石碑。桐生の織物商で詩人の佐羽淡斎（さばたんさい）が文化 3 年（1806）頃、詩人仲間と金沢に遊び東屋に泊まったとき、「料理、酒、接客、景色、人情すべてによろしい」と賞賛し、総宜楼の名を贈り、「金沢総宜楼に題す」と題した漢詩を詠んだ。同宿していた漢詩人大窪詩仏（1767～1837）がこの詩に感激し、文化 5 年、この詩を石に刻んで東屋庭内に建立した。「総宜楼の詩碑」という。昭和 30 年（1955）東屋が廃業したので現在地に移されたが、痛みが進んだので復元して彫り直された。［→佐波淡斎］［→大窪詩仏］

ここに言う「文化三年頃（一八〇六）」という年号は何によったか、また「料理……人情すべてよろしい」という引用は何によったか、などについては不詳だが、「総宜楼」＝「東屋」という疎通を得たことはありがたい。さっそく、ちくま学芸文庫の『江戸名所図会』についてみると[21]、そのものずばり「旅亭東屋」の図が載っている。宴会場あり、二階建ての母屋あり、離れありで、宴会場では取れたての魚を活き作りにして酒宴をもよおしている光景が描かれている。本書は天保年間に刊行されたものだから、約三十年（一世代）の開きがあるものの、おそらく文化文政期の東屋の繁盛ぶりも、こんなふうだったろうと、おおよその察しがつく。また『図会』の挿図にもなるくらいだから、ここが名店の一つだということは、早くから人びとに認められていたにちがいない。

以下の図の左葉に注目していただきたい。正面の入り口に縦書きの「東屋」という看板があり、入り口をくぐると、二階の軒下に横書きの「四時総宜之楼」という扁額がある。この挿図をしるべに東屋をおとなうものは、雅客・俗客の別を問わず、そこが「総宜楼」という雅称をもつということは先刻承知していたわけである。

旅亭東屋 『江戸名所図会』巻之二 ちくま学芸文庫

このように、もとからある和名とは別に、唐風に気取って漢名に改めるというのが、江戸の文人の習い性であった。文学といえば漢文学、学問といえば儒学が主流であった当時、自分の名前ですら中華風に改めなければ済まなかった。これを「修姓」「修名」という(「修」は形よくととのえるという意)。おそらく江戸時代に流行った弊風の一つだろう。はなはだしい例が荻生徂徠で、名は双松(なべまつ)、通称は惣右衛門(そうえもん)といったのが、姓を物、字を茂卿と称して、みずから「東夷の物茂卿」とへりくだってみせた。何に対してへりくだったか。「東の夷(えびす)」たる日本が、当時へりくだらなければならなかった国はというと、唐土(もろこし)以外にはない。江戸時代には、渡航もかなわぬ海彼の隣国であるのに、姓名をあちらにならって「形よくととのえて」みせたわけである。元来の姓「荻生」の「荻」が「狄」と音が通じるので、それをはばかり、祖先が「物部」氏の出なので、一字を修して「物」としたという説もある。おそらく、この説は正しいだろう。ちなみに徂徠とは号(ペン・ネーム)で、これまた中華風である。

元来、「東屋」といえば、『源氏物語』の巻名として由緒ある、奥ゆかしい言い方である。それなのに旅館の店名にすると、ありふれて聞こえるし、だいいち唐風の固有名詞たりえない。漢詩・漢文を作る際には、いかにも不体裁である。たとえば、かりに題名を「東屋の壁に題するの詩」としてみよう。すると、いかにも和臭ふんぷんとしているが、これを「総宜楼に題するの詩」とするなら、唐人にも呑みこんでもらえそうである。そこで漢詩人たる淡斎は、「総(す)べて宜(よろし)しき楼」、要するに結構ずくめの旅館ということで、あらたに「総宜楼」という唐風に聞こえのよい別名を与えたというのである。二階建て以上の建物でありさえすれば、唐土でも「〇〇楼」と称して咎められない。前掲の『江戸名所図会』中の「旅亭東屋」などを見ると、たしかに二階建ての座敷があり、全体にかなり奥行きがありそうである。上辺にもやもやと雲がただよっているのは、ここが仙界であることをほのめかしている。

事のついでいうと、江戸吉原は山東京伝の戯作『傾城買四十八手』の口絵に墨痕淋漓と書かれた「欲界之仙都、昇平之楽園」[22]の書によって大いに喧伝されたものである。これが当時、一種の広告文(キャッチ・コピー)として通用したわけである。このことから考えて、東屋も顧客に酒色ふたつながら粋なサービスを供したことは、ほぼ間違いない。ありていに言って、どうやらここのへんに、貴賤を問わずして、人気をあつめた秘密がありそうである。あの伊藤公がここで憲法の草案をねったというのはあやしいものだ。それはおそらく表向きで、もっぱら酒色の快楽を謳歌したことだろう。根が長州の浅黄裏だから、あだっぽい酌婦が陪席すれば、得たりやおうと、杯盤狼藉におよんだことだろう。それというのも、伊藤公はその種の艶聞(あるいは醜聞)に事欠かない御仁だったからである。

四

さて、東屋自体は、今はない。ところが、淡斎の「総宜楼の詩碑」は所をかえて現存するという。このことに触発された私は、俄然、デジカメをぶらさげて現地におもむいた。平成二十三年夏の白昼のことで

ある。激しい日盛りの中をほっつき歩いている閑人は稀で、方角をたずねようにも、行人にゆきあたらない。しかたなく瀬戸神社の神主にありかをたずねて、平潟湾にせり出した琵琶島に渡ると、当のいしぶみは社の木立の下にひっそりと佇んでいる。が、いかにも近年の復元にかかるものらしく、時代も苔もついていない。碑面は妙にてらてらと光っている。以下の写真はそのときのものである。この石碑に刻された一字一字を横書きながら以下に翻字する。

銀鱸紅蟹眼偏明況有邨醅香味清坐客
拌来鯨海飲傍人扶得玉山傾蒙鬆眠自
酔時熟冷淡詩於醒後成不識双橋残夜
雨夢中喚作退潮声
此上毛淡斎佐羽芳題金沢総宜樓之詩
也余愛其平淡有趣為書上石立諸楼之
傍文政五年歳在壬午冬十月詩仏老人
大窪行記　　広群鶴鐫

総宜楼の詩碑

本詩は『淡斎百律』にも収録されていて、本人も自慢の作であるらしい。しかも、江戸屈指の漢詩人・大窪詩仏の太鼓判つきである。(ただし『淡斎百律』では、題名は「金沢総宜亭」となっている。一字の違いながら、「楼」と「亭」の差は大きい。これについても、ゆるりと語ることにしよう)

ところで時を同じくして、ひょんなことから、「武州金沢総宜楼之碑石図」なる一枚刷らしきものが、神奈川県立図書館郷土資料室に所蔵されているのを見つけた[23]。同館の蔵書検索によって探しあてたのである。

さっそく館内で閲覧してみると、藍刷りの洒落た一枚物(36×24cm)である。客寄せの引札として作ったものか？　あるいは宿泊客への土産か、引き出物として配ったものであろうか？　何年に発行されたものか、何枚刷られたものか、つまびらかにしない。おそらく大量に出回ったものだと思うが、今のところ、この「碑石図」一枚しかお目にかかっていない。一枚きりにしても、おそらく江戸の観光案内パンフレットのごとき体裁の片々たる印刷物が、よくぞ残っていたものである。ほとほと感心したので、以下にその写真を掲げる。

武州金沢四時総宜之楼碑石図(36×24cm) 神奈川県立図書館蔵

まず上辺に「楼上扁額」として大窪詩仏が揮毫した額が掲げられている。「縦一尺二寸×横六尺」の扁額で、「四時総宜之楼」とあり、添書に「文化丙午春与／緑陰米庵竹庵／同宿此楼因書／而与之／詩仏居士印」という。これが前掲の『江戸名所図会』で触れた軒下の扁額である。

また右辺に目を移すと、「建前碑石／高サ六尺余／巾三尺余／一字枠方二寸三分」とあり、その下に「石上ニ仮名ナシ今読ミヤスカラン為ニ／之ヲ付ス」とある。昔は「六尺豊かな大男」といったものであるが、六尺の高さもある石碑ならば、さぞかし目立ったことだろう。例の琵琶島に移された復元の石碑も堂々たるものだった。ちなみに、『江戸名所図会』の東屋の庭には、この石碑は見当たらない。なぜだろうか？

さらに左辺下には、「武州金沢／総宜楼／東屋蔵版」とあって、この刷り物が東屋の板行にかかるものだということが分かる。

この刷物の抜かりないところは、「広群鶴鐫」という石匠の名前まで忘れずに印刷しているということである（世に石匠の名を記さない碑文の翻字は多い）。広群鶴といえば歴代、江戸で右に出るものはいないと言われた名工で、江戸のこれはという碑刻はほとんど手がけている。[24] 石碑は今日以上にモニュメ

ントとしての価値があった時代のことだから、「広群鶴刻」あるいは「広群鶴刻字」という文字に見覚えない人のほうが少なかっただろう。広群鶴に墓記を刻んでもらった有力者も数知れない。それほどの名匠なのである。

このように、当時の赫々たる文化的有名人の名を三つも連ねれば、おのずと広告的値打ちがあがるだろう。事情通の泊まり客なら、このパンフレットを片手に学のあるところをひけらかすこともできただろうし、また土地に帰ったら帰ったで、土産物として自慢話の一つもできただろう。パンフレットが半紙くらいの寸法で、折り畳めば懐にも入って、旅客の荷物にならない――というところが、また心憎い。江戸人はこういう名所に関する印刷物を愛好したものである。

以下は推測にすぎないが、詩仏、淡斎たちの承諾を得たうえでの発行だったろうし、あるいは文学的プロモーターとして有能だった詩仏(ないし商売上手の淡斎)の指嗾によるものだったかもしれない。いや、憶測をたくましくして言えば、淡斎・詩仏の没後、東屋が三人の名士にあやかろうとして、独断で刷ったものかもしれない。広群鶴にしたところで、自分が彫った石碑の図を見せられても、とやかく言わなかっただろう。石匠にとって大事なのは、いつの世までも残る「石」である。いずれこの世から消えてしまう「紙」ではない。だいいち「知的財産権」なぞという、やかましいもののなかった時代の話である。

それはそれとして、この刷物の断り書きにもあるように、「仮名」は元来、石に彫られたものではない。刷り上げる際に、傍訓のように付け加えたものである。文人騒客ならともかく、農工商の泊まり客には漢詩・漢文の白文は読めない。おそらく大半を占める一般の宿泊客の理解の助けに、わざわざ付したものだろう。

旅亭東屋の軒下に掛かる扁額と庭内に立つ石碑――それだけでも客の目を引く。宿泊客は好奇の目を光らせて、いちいち、あれは何？　これは何？という問いを発しただろう。しかし、忙しく立ち働く宿屋の女中に、その説明はしかねただろう。客の問いに対して、これ一枚を示せば言い訳が立つ。そういう便宜もあって、この一枚物が刷られたに違いないが、真の狙いはというと、ずばり宣伝以外にない。当時の一大詩宗・詩仏の書、桐生の富豪として知られた淡斎の七律、「谷中の広群鶴」として知られた御碑銘彫刻師の刻字、三者が一枚の紙上にみごとに揃って、まるで相撲の三役揃い踏みを見るようである。こういった賑々しいパンフレットを、江戸のひとはことのほか好んだ。これをコマーシャルに使うなというほうが無理だろう。

さて、いうところの「仮名」の傍訓と訓点によって、読み下すと、こうなる(読み間違えもあえて踏襲。ただし読みやすいように改行し、句読点も施した)。

銀鱸紅蟹(ギンロコウカイ)　眼(ガン)　偏ニ(ヒトエ)　明(アキラカ)　ナリ、況(イハン)　ヤ　邨醅(ソンバイ)　香味(カウミ)ノ清(キヨキ)キ有(ア)ルヲヤ。
坐客(ザカク)　拌(トモナ)ヒ来(キタ)ツテ　鯨海(ケイカイ)ノ飲(イン)、傍人(ホウジン)　扶(タス)ケ得(エ)ル　玉山(ギヨクザン)ノ傾(カタム)クヲ。
蒙鬆(モウスウ)ノ眠(子ムリ)　醉時(スイジ)ニ自(ヨ)リ熟(ジユク)ス、冷淡(レイタン)　詩(シ)ハ醒後(セイゴ)ニ於(ヲイテ)テ成(ナ)ル。

識ラ不　双橋　残夜ノ雨、夢中　喚ンデ退潮ノ声ト作ス。

此レ上毛ノ淡齋、佐羽芳、金沢総宜楼ニ題スル之詩也。
余、其ノ平淡　趣　有ルヲ愛ス。為ニ書シテ石ニ上セ、諸ヲ楼之　傍　ニ立ツ。
文政五年、歳壬午ニ在ル冬十月、詩仏老人、大窪行、記ス。　広群鶴鐫

昔から名所佳景と文学・美術は付きものである。もともと名勝であり古跡であるところでも、詩人、歌人、俳人・画人などの文学的・美術的お墨付きあれば申し分ない。早い話が、文化的有名人の詠んだ詩や描いた絵などによって、名所めぐりをする大衆の必見の観光地たりうるのである。たとえば弥次さん喜多さんでも、こういうお墨付きによって、いっぱし文雅な旅情に感じ入ることになるだろう。

そもそも、風景自体は美しくない。だれか先人の発見によって風景美は公認されるのである。金沢八景も例外ではない。「大明東皐心越禅師」という渡来僧の準擬と八詠とによって、ほとんど不動の勝名となったと言っていい。この準擬・八詠の祖景が中国湖南省の名勝「瀟湘八景」に関する先人の詩画であったことは、周知のことだろう。さらに『江戸名所図会』にも、禅師の八景八詠が書き下し文の形で掲載され[25]、人口に膾炙したものと思われる。いわく「洲崎晴嵐」、いわく「瀬戸秋月」、いわく「小泉夜雨」、いわく「乙艫帰帆」、いわく「称名晩鐘」、いわく「平潟落雁」、いわく「内川暮雪」、いわく「野島夕照」と。この勝名からして、すでに雅である。それは「瀟湘八景」という先例の伝統的重みのおかげである。ある調査によると、日本各地には「近江八景」「金沢八景」をはじめ、「〇〇八景」という勝名が千百もあるという。ついでながら、「横浜八景」というものまであるそうだ。

話をもどそう。この淡斎の七言律詩は「銀鱸紅蟹　眼　偏ニ　明　ナリ」云々で始まるが、詠い出だしから、たんに耳で聞いただけでは分からない、お経同様珍紛漢である。訓読とは便利なようで不便なもので、漢字と仮名を付きあわせて読んで始めて合点がいく。耳と目の共同作業をもってしなければ、理解できないのである。この詩を「平淡ニシテ趣有リ」と評した詩仏にとっても、やはり事情は変わらない。

とはいえ、このような漢文訓読体というのは、明治、いや、昭和の前期まで有力な文体だった。典故(引喩)うんぬんを抜きにして、なんとなく分かるというのが、この文体の有難味である。たとえば、江戸の『商売往来』『百姓往来』『消息往来』の文体も[26]　――いわゆる変態漢文であるけれども――訓点と平仮名の総ルビ(ただし送り仮名は片仮名)が振られているから、目と耳の共同作業によって、商人にも農民にも何とか呑みこめたのである。こういう読書法が一般に普及していたということから考えて、士はもとより、農工商の相当数が、聴覚と視覚の働きをもってすれば、「銀鱸紅蟹　眼　偏ニ　明　ナリ」云々が読めたのである。また江戸時代の驚くべき識字率の高さから考えても[27]、そう見なすほうが自然である。

しかし、いまの我々には漢字も訓読もぴんとこない。典故にいたってはなおさらである。そこで、この詩の解釈をしたいと思うのだが、この詩は巧妙に引喩を用いているところもあって、それを解きほぐすには、もはや紙数がつきた。これについては稿を改めて述べることにして、最後に「隣家花」(『淡斎百絶』)[28]を

引用して、今後の考察のために、淡斎詩の勘所を押さえておこう。

籬外翩翩蛺蝶過　籬外　翩翩として　蛺蝶過ぎ
倚闌看到夕陽斜　闌(おばしま)に倚りて　看到(みた)り　夕陽の斜めなるを
東風似解詩人意　東風　詩人の意を解するに似て
吹送隣園数片花　吹き送る　隣園　数片の花

これは春愁の詠。七言絶句。この形式は日本人には一番つくりやすい。さながら范成大の連作『四時田園雑興』などをお手本にしたような景色である。というよりも、まるで『紅楼夢』の賈宝玉(御曹司で女好きの主人公)でも作りそうな七絶の詩境に近い。第一詩集の『淡斎百絶』の出版は文化六年、淡斎三十八歳。遅巻きながら、中央詩壇で詩人としての地歩を固めていた頃の作である。すでに文化五年刊の『五山堂詩話』巻二[29](菊池五山の詩評集)の中では、こういう評を得ている。

「桐生の佐波芳、字は蘭卿、号は淡斎。家道甚だ豊にして、性、吟咏を好む。余、再四相逢ふも、未だ其の詩を知らず。頃(さきごろ)詩仏に其の一冊を投ぜられ、因てこれを撷(けつ)読す。亦(ま)た能(よ)く宋元の風趣を得る者なり」(原漢文)

まずまずの評価だろう。が、どうだろうか？　眼光紙背に徹すれば、どうも淡斎の金力が言わしめた評語(リップ・サービス)のような節がある。というのも、『五山堂詩話』には淡斎詩が二十五首も採録されていて、地方詩人にしては、『詩話』中、異様な数だからである。[30]　これは大金持ちの淡斎が菊池五山に対して、指導料なり添削料なり掲載料なり、相当の金子を払った結果だと容易に推測される。五山も五山で、ばかに金銭に細かったということは、森鷗外の史伝小説『寿阿弥の手紙』[31]によって隠れもない逸話となっている。しかし、それはそれとして、「桐生の佐羽淡斎」の名は、この『詩話』によって全国に知られようになったことについても言及しなければ公平を欠くだろう。[32]

さて、「闌に倚って」夕陽を眺めれば、愁いがつのるばかり、というのは漢詩の常套表現である。それから、吟懐が胸次を去来したとき、あえて自分を「詩人」「詩家」と称するのも、古来から多く見かける例である。しかし、たとえ常套とはいえ、淡斎自身が「詩人」をもって任じていたことは間違いない。

文化十年、第二詩集『淡斎百律』刊行。淡斎四十二歳。この詩集の「蛙声」(七律)の尾聯にも「詩人、元是(もとこ)れ聴いて厭ふ無く、一任す、公私自在に鳴くに」(原漢文)と詠んで、詩人たることを表明しているのである。淡斎は三十九歳で二世吉右衛門を継いだが、もしこの家督相続がなかったら、江戸に出て中央の漢詩人たらんと志しただろう。前にも述べたように、大事な家業を忘れて作詩に没頭したせいで、ある人から厳しく咎められたという内容の律詩を残している――それほどの騒客だったからである。

こういうところに、いわゆる旦那芸を超えようとする、作詩への強い志向がありはしまいか。少なくとも、これを常に念頭において淡斎詩を見ていかなければ、肝心なことを見落とす危険があるだろう。そもそも律詩というのは、音律の規則が厳格すぎるので、中国人ではない日本人には不得手なジャンルである。

それをあえて百首も作ったというのだから、この詩業は看過できない。さらに時を置かず、文化十二年には第三詩集『菁莪堂集』を世に問うている。さよう、文化年間に、淡斎は「詩人」として絶頂期を迎えつつあったと言っていい。

そればかりか、中華にも例を見ない文化事業にも着手する。しかし惜しいかな、志なかばで天命がつきて挫折。それは財産も生涯もかけた、途轍もないものだったが、その文化事業とは何か、次回に述べることにしよう。

【付記】『淡斎詩集』について

これは佐波淡斎の以下の別集の、二編ないし三編を合冊にしたものを言うようである。

① 第一詩集『淡斎百絶』 文化六年刊。山本北山・菊池五山の序、大窪詩仏の後序。巻菱湖の書。

② 第二詩集『淡斎百律』 文化十年刊。大窪詩仏・市河寛斎(市河米庵書)・菊池五山(中井董堂書)の序。

③ 第三詩集『菁莪堂集』(一に『淡斎三編』という)。 文化十二年刊。亀田鵬斎、大窪詩仏、菊池五山、柏木如亭の序。津久井雨亭、栗田逸斎の校定。

①②は『淡斎詩集』として国立国会図書館鶚軒文庫蔵のマイクロ・フィルムの写真複写によって見ることができる。また②は簡単に早稲田大学総合データベースの PHD ファイルによって見ることができる。

『国書総目録』よると、鶚軒文庫は①②を併せて『淡斎詩集』と呼び、関西大学蔵『淡斎詩集』は①②③を併せて『淡斎詩集』(写本)と呼ぶ。関西大学蔵のものは未見。

神奈川県立国際言語文化アカデミア図書室の深野亜希子氏の尽力により、桐生市立図書館に①②③をあわせた『淡斎詩集』が所蔵されていることを発見していただいた。さっそく桐生市立図書館に赴いて複写させてもらったが、このとき、同館の大瀬裕太氏にはさまざまな便宜を講じていただいた。ここに記して両氏に対して感謝の意を表したい。

また神奈川県立図書館所蔵の資料については、撮影ならびに掲載の許可をあたえていただいた。同館の方々に、この場をかりてお礼を申し上げたい。

【注】

[1] もとは沢庵和尚『鎌倉記』の一節であるが、『江戸名所図会』巻之二 p.363 の「瀬戸橋」に引かれているものを引用した。後者のほうが江戸人の目につきやすかったので、あえて後者の引用文を引く。なおテキストは、市子夏生・鈴木健一校訂『新訂江戸名所図会』(筑摩書房　一九九六年十月)を用いた。
[2] 前掲『江戸名所図会』巻之二 pp.368-9 の「瀬戸橋」其二の挿図。本図は後に掲げる。
[3] 歌川広重『広重武相名所旅絵日記』(鹿島研究所出版会　一九七四年七月)原色図版56 枚、原寸大複製 (付:広重武相名所旅絵日記解説) 神奈川県立図書館蔵。
[4] 前掲「広重武相名所旅絵日記解説」pp.19-30
[5] 中村幸彦「近世漢詩の諸問題」〔中村幸彦編『近世の漢詩』(汲古書院　昭和六十一四月)所収。p.26.〕
[6] 根津美術館発行『瀟湘八景画集』(昭和三十七年十月)
[7] 長い間、この『広重名所旅絵日記』は日の目を見なかった。昭和四十五年の晩冬、千葉で発見された。発見の経緯は複雑なので、ここでは語らない。
[8] 神奈川県立図書館の資料情報には「著者名　多桑斎　＊＊　/　タソウサイ　」「出版　〔　〕　東屋」とある。不明な点の多い印刷物である。
[9] 金沢文庫所蔵のものは「神仏分離以前の注記が見られるので、幕末の版行だろう」とされている。金沢文庫特別展図録『金沢八景　歴史・景観・美術』(神奈川県立金沢文庫　平成五年四月)p109. しかし注7の神奈川県立図書館所蔵のものは、構図は同じでも色の刷り方が同一ではない。
[10] 「武陽金沢八景略図」(初代広重画・多気斎原画／金龍院版) 神奈川県立金沢文庫蔵。添書に「金沢多喜斎／於江都広重模写」とある。「多喜斎」については不詳だが、八景図の元祖として重要な存在であるという。前掲『金沢八景　歴史・景観・美術』p103.
[11] 千代本も西野屋も同様の「武陽金沢八景略図」を版行しているが、ともに明治以後の作。前掲『金沢八景　歴史・景観・美術』pp107-108.p.110.
[12] 揖斐高「化政期詩人の地方と中央――佐羽淡斎を中心に」(『江戸詩歌論』汲古書院　一九九八年二月)pp.286-318
[13] 菊池五山編『五山堂詩話』は『詞華集日本漢詩(2)』(佐野正巳編　汲古書院一九八三年十月)、稲毛屋山編『采風集』と柏木如亭編『海内才子詩』は『詞華集日本漢詩(7)』(富士川英郎編　汲古書院一九八三年八月)、佐原菊塢編『盛音集』は『詞華集日本漢詩(10)』(佐野正巳編　汲古書院　一九八四年五月)所収のものを参照。
[14] 渡辺崋山「毛武遊記」、芳賀登編『崋山全集』(日本図書センター　一九九九年一月)所収 pp.3-52.
[15] 池澤一郎『江戸時代田園風景漢詩選』(農山漁村文化協会　二〇〇二年十一月) pp.34-46. pp.101-102　pp133-138　pp.168-170　pp.191-197.
[16] 淡斎主人訳・青木正児校註『通俗古今奇観　附月下清談』(岩波文庫　昭和七年二月)。
[17] 淡斎主人すなわち佐波淡斎の同定については、石崎又造「桐生の詩人佐波淡斎事績(上)」(『斯文』昭和十二年十二月)pp.41-2.長澤規矩也『長澤規矩也著作集』第五巻(一九八五年三月　汲古書院)所収「江戸時代に於ける支那小説流行の一斑」p.141.「江戸時代に於ける水滸伝の流行」(上)p.3-55. これによると、「通俗古今奇観」の訳者淡斎主人を佐波淡斎にあてたのは、大正十五年の頃、辛島驍が始まりだという。
[18] 碑表には大窪詩仏、山本緑陰、糸井榕斎、今川紺桃、木百年、佐羽淡斎の七絶を一首ずつ刻し、碑陰には山本北山の散文を刻したもの。みな日本漢詩に特有のジャンル「温泉の詩」である。この「温泉詩」については後日、論じる用意がある。
[19] 『淡斎百律』所収七律。「予耽吟詩動廃家務有人痛禁之者有感戯述」(予、吟詩に耽り、動すれば家務を廃す。人の痛く之を禁ずる者有り。感有りて戯れに述ぶ。)というタイトルの詩である。『淡斎百律』は国会図書館顎軒文庫蔵マイクロフィルム、あるいは早稲田大学古典籍総合データベースによれば、簡単に入手できる。
[20] “わ”の会かねざわ歴史事典編集委員編『新版かねざわの歴史事典　INDEX 金沢』(金沢区生涯学習“わ”の会発行　平成二十二年五月) p.7.
[21] 注1前掲書 p.368-9.
[22] もともと清の余懐撰『板橋雑記』上巻にある言葉。それを山東京伝が借用した。和刻本『板雑記』(明和七年刊)は、山崎蘭斎訳として大いに流布したが、それは後刻本『唐土名妓伝』と題名を替え

てからのことである。ここでは太平書屋の影印本(平成九年八月)によった。また、大木康『中国遊里空間』(青土社　二〇〇二年一月)p.25 参照。
[23] 「武州金澤四時總冝之樓碑石圖」一枚。東屋。(36×24cm) 神奈川県立図書館蔵。
[24] 森章二『碑刻ー明治・大正・昭和の記念碑』(木耳社　二〇〇三年十月)pp.104-113.
[25] 注 1 前掲書 pp.323-324.
[26] 根岸茂夫監修『江戸版本解読大字典』(柏書房　二〇〇〇年九月)pp.32-36.
[27] 水谷三公『江戸は夢か』(筑摩書房　一九九二年十月)pp.105-109. 中島蘊外『天領信濃坂木中之条陣屋乃研究』(長野県聖冠郷土文化研究会　昭和三十六年一月)pp.159-160 の「素読吟味願」「素読吟味届」を見ると、寺子屋の生徒はもちろん、教学人にすら苗字を持っていない。天領とはいえ、坂木も中之条も郷曲の地である。もって江戸の識字率の高さを知るに足る。
[28] 『淡斎百律』は国会図書館顎軒文庫蔵マイクロ・フィルムの写真複写参照。
[29] 注 9 の『五山堂詩話』巻二。
[30] 注 8 の前掲書参照。
[31] 『森鷗外全集』第四巻(昭和三十四年五月　筑摩書房)pp.198-200.
[32] 揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』(角川書店　二〇〇一年十二月)には、五山にとって束脩の多寡が大きな関心事だったことが実証的に述べられている。特に第十二章1の「『五山堂詩話』の経済学」pp.263-241参照。